

音の渦の中で自分の中の括りや
枠組みがどんどん外されて日頃、心の奥に押しやって
「わかってもらえない」と鍵をかけた
「孤独」な感情が溢れ出ていく。

わかってくれない誰かを恨み
わかってやれない自分を叩く 「残橋」

・・・なんてミディアムな曲にのせて、ぬくもりと脆さと孤独さを含有した灰二の声で歌われたら
強がりも抑えていた感情も堰を切ったように流れ出てしまう。
繊細さは孤独に敏感で、人の痛みを人一倍感じ取る。
それを詩に紡ぐ心を、表現する声を灰二は持ち合わせている。
個を尊重しているはずの時代は、なぜか閉塞感に満ちていて息苦しい。
殺伐とした日常に癒しの文字は溢れるが、心は空虚なままだ。
思いは求めるほどに彷徨って枯渇していく。

THE VANILAの音楽には、枯渇した心を自然とほころばせ、歩みだす力を与えてくれる作用がある。
涙が溢れそうになるのは、そんなバンドにやっと出会えた安堵と
音楽によって浄化されている証なのだろう。
孤独な感情を微率でも抱えている人間に、THE VANILAの音楽は有効だ。

灰二は孤独を抱え彷徨っている、まだ見ぬ同志(とも)にメッセージを伝えるために
再びステージに戻ってきたのではないかな？
実は、このTHE VANILA、89年に結成され、93年に解散。2006年の9月に再始動している。
THE VANILAは渡辺灰二と伊藤毅のユニットで、現在、ギターとドラムはサポート。
歌うことに距離を置いていた灰二が、40代を迎えたメンバーが再びステージに立つことを選び
目の前にいるという事自体に既に大きなメッセージが存在している。
その男達が「ここからはじめよう」と発するメッセージには含蓄と重みがある。
新しいチャンスに踏み出す勇気を、まだ見ぬ世界、友に出会う希望を持ち続けろと歌う。
「大丈夫だよ、俺たちがいるから」と深みのある音楽で新しい一歩を後押ししてくれる。
その事に聴き手は大きな力を貰う。

ロックの真骨頂がここにある。
THE VANILAは、次回3月28日のライブで新たな世界を求め
サポートに新ギタリスト中村太郎を迎える。
音色が明るく、聴くものを前向きな気分させる太郎のギターは
メッセージ性の強いTHE VANILAの歌を後押しするに違いない。
灰二や伊藤同様、心に「傷」と「熱」を持った男がTHE VANILAと奏でる音楽が楽しみでならない。